

教育と文化

みんなで
考えよう
問題
同和
人権
No. 252

このコーナーは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

● 問合先 生涯学習課人権・同和教育係 ☎ 3186

気になる日本語みつけた

「日本語は美しい」と言われています。心地良いリズムや感性豊かな表現力が、他の国の言葉にはない特徴といえるようです。

しかし一方で、『片手落ち』、『舌足らず』、『足が無い』などの気になる言葉も見受けられます。いずれも体の『障がい』がマイナスイメージの象徴として表現されていて、障がい者の人権を侵害していることが懸念されます。普段何気なく使っている言葉の中にも、人を傷つける氷の刃やいばは潜んでいます。

この問題を解決するために、私たちにもできることがあります。例えば、『片手落ち』、『十分』、『舌足らず』、『説明不足』、『足が無い』、『移動手段が無い』など、素直な表現で言い換えればよいのです。伝えたいことがわかりやすくなる効果があります。

世代を越えて伝えられてきた風習や価値観は、大切にしなければいけません。体の特徴を例えて表現するマイナスイメージの言葉は、見直すべき日本人の『負の文化』と言えるのかもしれませんが、なぜなら、幸せになるために生まれてきた私たちが、日常で使う言葉によって人を傷ついたり、傷つけられたりするとは許されないからです。

大切なことは、子どもの視線に立つことです。一人一人が相手の気持ちを自分に重ねて想像し、子どもにも説明できないことを見直すことで社会が成長していきます。

「昔から言われているから」、「まわりの人が言っているから」という窮屈なこだわりを捨ててみませんか。未来を担う子どもたちのためにも、美しい日本語をもっと素敵そてきに使っていきたくらいですね。

郷土の文化財

伊万里の遺構シリーズ／埋葬遺構を中心として⑦

● 問合先 生涯学習課文化財係 ☎ 1262

夏崎古墳

(東山代町日尾 昭和46年度調査)

夏崎古墳は、江戸時代に墳丘の盛土を干拓用の埋め立て土に使用したため、墳丘の大半が失われています。元は高さ約5.5m、直径約24mの円墳(円形の墳丘)だったと考えられます。

古墳の主体部は、円墳中央に設けられた横穴式石室になっていきます。横穴式石室は石室の側面に出入り口があり、遺体を納める玄室けんしつとその玄室につながる通路(羨道)を石積みで構築したものです。遺体を納めたあたりは、玄室と羨道の間には大型の板石(閉塞石)を設置して、玄室を封印します。石室と外をつなぐ出入り口は、墳丘の側面に通じているため、開封が容易で、複数の人を埋葬(追葬)することができず。しかし、夏

崎古墳で実際に追葬が行われていたのかは不明です。

横穴式石室は、四世紀後半から北部九州を中心に広がったもので、朝鮮半島からもたらされた新しい墓制です。夏崎古墳の築造年代は、横穴式石室の形態から、五世紀後半と考えられますが、近年の研究では、五世紀前半ともいわれています。次号では、夏崎古墳の副葬品について紹介します。



↑夏崎古墳の出入り口の様子